

真宗大谷派
東京三組組報
Tokyo Group 3 NEWS Paper

縁

「能所の因縁、和合すべしといえども、
信心の業識にあらずは光明土に到る
ことなし。」

『教行信証／行巻』

vol.12

発行者 東京三組組報事務局
発行日 2021年12月1日
編集・デザイン 青山 満

巻頭コラム

「礼拝・聞法・正信」渡邊尚康 (忠綱寺副住職・東京三組教導)

連載第2回

宗祖 親鸞聖人」生涯と周辺

平松正宣 (教元寺副住職・東京三組教導補佐)

特集記事

「蒼婆と慚愧」～王舎城の悲劇Ⅲ～

青山満 (善仁寺住職・東京三組副組長)

阿弥陀の華座は蓮台でありま
すが、青蓮華台が用いられてい
ます。それは百葉華台とも申し
まして、じつは、華ではなくて葉
を象徴しているといわれます。
つまり、蓮華においては無価値
なる葉にすぎません。
だけれども、よく考えてみれば、
華や根にその価値を見ている
のは人間の価値観でありましよ
う。蓮華そのものにとっては、花
も根も葉によつて育てられてい
ます。
むしろ、葉こそ蓮華のいのちで
あります。ちようと、「ただ念仏」
というのは、そういうものであり
ます。

(藤元正樹)



「礼拝・聞法・正信」

文・渡邊尚康

忠綱寺副住職
東京三組教導門徒会事務局



真宗門徒としての生活

タイトルにあるのは、東京三組の教化テーマです。教化は一般的に「きょうか」、仏語読みなら「きようけ」とも発音します。この場合は「きょうか」になります。この場合は「きょうか」になりませんが、教え導き、望ましい方向へ進ませるという意味があります。みんなの望ましい方向は仏道にあるのです！と熱弁するつもりはありません。寄り道ばかりの私なので、自分なりにテーマを読み解くのであれば、礼拝・聞法・正信は、阿弥陀さんを中心とした仏道の軸であって、僧侶含め真宗門徒が忘れてはいけないライフスタイルなのだと思えます。(ノ)

何に礼拝するのか

京都にある専修学院という全寮制の学寮在学時は、食堂やご本尊がある部屋に入る時、必ず頭礼(一礼)をして入室をする決まりがありました。卒業して自分のお寺に帰ってくる時、すっかり忘れて行わなくなるといふ声もよく聞きます。しかしながら、例えば無意識であつたとしても頭礼をするという習慣化は、何を大事にしているのかという意識を生み出し、丁寧な所作そのものが、私自身の心を調える作用にもなります。パタパタ歩く人より、姿勢よく歩く人の方が優美に見えるのは、心に余裕があるように感じるからです。本来はそうしたいけれど、忙しい日常生活で忘れてしまっている時は、お茶をゆ

つくり淹れるでも良いし、窓拭きでも良いし、ゴルフの素振りでも良いし、丁寧な動きを自分のルーティンにして、忙しさをリセットすると良いのかと思います。
身を通して聞く教え

聞法は文字通り、《法〓仏の教え》を聞くということ。説法といったり、法話といったり、説教といったり似たような言葉がたくさんあつて、この場ではどういう表現が正しいのかなど、言葉選びに苦慮することもあります。が、仏様の教え、高僧の教え、仏教に影響を受けた人の書物を読んだり、聞いたりといろいろなスタイルがあります。ただ知識を蓄えるということも重要であると思いますが、言葉に触れ自分がどう感じたのかを《身》に聞く。聴くのではなく、《身》を通して聞こえてくる法〓聞法、ということが大事とされています。加えて、その感じたことを話す仲間(同朋)との場、聞法道場としてのお寺という場、それらが活き活きと開かれていかなければ、独りよがりのもことになるのだと思います。
半眼の心をもつてと見える
昔、声明(お経)練習の時間に聞いたのは、目を閉じて読経してはいけないということ

とでした。神社であれば願いごとをする時は、感情的になつて目を瞑る光景をよく見かけます。しかしお念仏の声そのものは独りで悦に入るような願いごとの声ではないのです。お経を唱えるのか、称えるのかという二つの「と見える」という字の違いもよく目にします。声に出し詠唱する、その音の意味がある「唱える」に対し、真宗では「称える」を主に用います。そこには「称名」、阿弥陀さんの名を褒めたたえるという意味と、声に出した(出たといつても良いですが)その音、念仏の声を自分の耳でまた聞く。そのことで、お念仏そのものが教えとなつて、耳の底に残っていくということがあります。お経をあげる(聞く)時間ですら、悦に入る時間ではなく、自分の身で聞く時間となるのです。

逆説の信心

最後に正信になりますが、辞書などでは正しい信仰となつています。ああそうか、では正しく阿弥陀さんを信仰していこうと、素直に思えば文句ないのだと思いますが、そうなれ

「耆婆と慙愧」

文・青山満

善仁寺住職
東京三組副組長

ないことの方が多いのではないでしょう。私たちの歩みは時に信じ、時に疑い、時に傍らに信心を置きながら他のことをし、といろいろ寄り道をしながらの歩みです。ということ、は、正しい信心は阿弥陀さんの側にしかないということになります。一種のパラドックスです。私の中に本当の真実は無いから、真実はある。私の中に本当の善は無いから、絶対の善はある（偽善でもやらないよりは良いとは思いますが）。闇を感じるの、は、光の存在を知っているからということもありません。逆説、裏表の関係を、持つて、片方が片方で在り続けられるということになります。

曲がりなりにも自分の歩みをもつて一生を尽くす。阿弥陀さんの信心を自分の信心とするのか、自分の真宗で死んでいけるのかという、背中だけ押されて歩かされる道ではありませんが。真宗門徒の仏道とはかくあるべきものか、この教化テーマが言い当てているように感じられます。

東京三組組報「縁」前々号（第十号）で途中となっていました。「王舎城の悲劇」のその後を続けたいと思います。

前回は皮膚病に犯され苦しむアジャセ王を慰めんと、六人の家臣がそれぞれの教えを勧めますが、アジャセ王は立ち上がるとうとしない、というところまででした。

ここで、七人目の家臣が登場します。名前を「耆婆（ジーヴァカ）」といいます。家臣といっても経典には「大医」とありますので、お医者さんです。そして、耆婆は仏教に深く帰依をしていた人でした。さらに、耆婆はアジャセ王とは異母兄弟であったといえます。（兄であるという説と、弟であるという説とあります。）

経典はこの耆婆をもつて仏陀釈尊への案内人として要の場面で登場させます。アジャセ王の兄弟でありながら、家臣でありお医者さんとして仕えていたのでしょうか。善導大師は『観経疏』で「父の王の子にして奈女の児なり」と紹介します。父親はアジャセと同じビンバシヤラ王です。

母親が「奈女」とは何でしょうか。これは「奈樹の木の股から発見した女兒」という意味です。奈樹とはマンゴーの木といわれています。これは捨て子の婉曲的表現とも言われます。

つまり、アジャセ王の母であるイダイケ夫人との身分の差を表しているのでしょう。「説では兄でありながら、アジャセ王の誕生によつて二度はマガダ国を去つて、戻つてきた方とも伝わっています。

話を進めます。その耆婆が苦しむアジャセ王に近づき、言葉をかけます。その第一声は『大般涅槃經』には次のように書かれています。

大王安眠を得るや否や

「大王よ、よくお眠りなられますか？」とお聞きになったのです。

さて、何気ない一言であるように思いますが、六師外道を勧めた六人の家臣たちの第二声は何でしたでしょうか。総じていへば「大王よ、どうしてそんなに苦しんで

いるのですか？」です。前々号でも申し上げましたが、なぜ苦しんでいるのか、それは皮膚病という一目で分かる身の苦しみ、そして父を殺してしまつたという悔恨の心の苦しみであることは百も承知の上での言葉であるのです。苦しみを見て見ぬフリをして、「あなたには罪がない」とまでいい、慰めの言葉をかける六人の言葉にアジャセ王は立ち上がりません。この点に親鸞聖人はさらにもう「歩読み変え」という形で意味を見出します。親鸞聖人の読みは

大王、安くんぞ眠ることを得んや
不や（真宗聖典2507頁）

です。もちろん「安」を「いずくんぞ」と読むのは無理があるわけです。終わりの「や」と併せて読めば、「どうして眠ることができませんでしょうか」という意味を見出ししているのです。

これは、このあとに続く、罪の自覚によつて起こる心「慙愧」を押さえる上で大事な点であると、「眠れない」という事実に向き合うことを促す

耆婆の心を明らかにされたのでしよう。これに対して、アジャセ王は

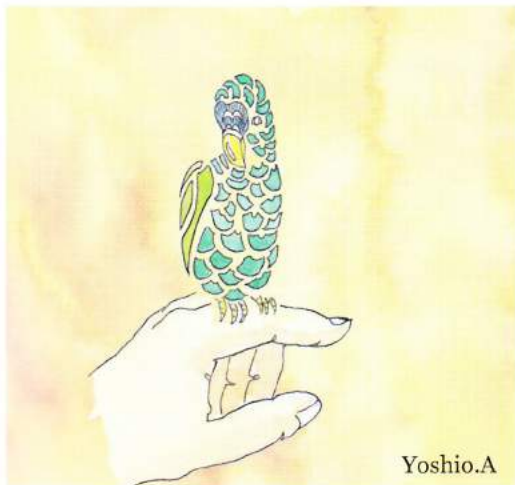
我が父法王、法のごとく国を治む、美に辜なし。横に逆害を加す、魚の陸に処するがごとし。(真宗聖典2057頁)

善き王で罪のない父を殺してしまつた、それは魚を陸にあげておくような残酷なことをしてしまつた、と答えます。これに対して耆婆は

善いかな、善いかな、王、罪を作すといへども、心に重悔を生じて慙愧を懐けり。(真宗聖典2057頁)

と指摘します。アジャセ王が苦しむ、その正体は「慙愧」であるということです。そして、慙愧の内容について、積尊の言葉として次の言葉をアジャセ王に伝えます。

二二の白法あり、よく衆生を救く。二二には慙、二二には愧なり。「慙」は自ら罪を作らず、「愧」は



Yoshio.A

他を教えて作さしめず。「慙」は内に自ら羞恥す、「愧」は発露して人に向かう。「慙」は人に羞す、「愧」は天に羞す。これを「慙愧」と名づく。「無慙愧」は名づけて「人」とせず、名づけて「畜生」とす。(真宗聖典2057〜2058頁)

『教行信証』の信巻の中でも特に印象深いお言葉です。こちらにも、『大般涅槃経』からの引文です。要約しますと、慙愧とは自分も罪を作らないし、他者にも罪を作らせない、そして、自ら羞じ、人に対して羞じる。そして、天に対して羞じる。慙愧の心なき者は人ではなく畜生である。という事です。

ここで、「畜生」とは動物を人間と分け、

見下しているわけではありません。ペットと人生を歩んでこられた経験をお持ちの方はお分かりになるかと思いますが、ときに動物は人間以上に愛情深い心を表します。

ここでは、経言に順えば、「羞じる」ことを知らない在り方ということになるのでしよう。それは、裏返せば罪への無自覚さという、誰もが持ち得ているものではないですか。 つづいて

慙愧あるがゆえに、すなわちよく父母・師長を恭敬す。慙愧あるがゆえに、父母兄弟姉妹あることを説く。(真宗聖典2058頁)

「師長」は「師」と「長者」、年長者ということですが。私たちは、このように言われると、「そんなことは分かっている」と読み飛ばしてしまうのではないのでしょうか。

しかし、大事なことはアジャセ王はダイバダッタにそのかされたとしても、自ら師長(ここでは父王)を失い、さらには母に手をかけようとしたのです。アジャセは何を失ったのでしょうか。それは「人」であるということでしたのでしよう。

それは「慙愧」によって自ら回復しなげ

れば、誰かが再び与えてくれるものではありません。

廣瀬杲先生(元大谷大学学長)は、次のように仰られます。

それまでの六師外道というのは、人間を人間以外のところへ導こうとしたわけでしょう。いうならば、耆婆からいわすならば、畜生のところへ導こうとしたわけです。(中略) 仏になるということは人になるという事なので。仏教における救いの意味というのは何かというと、人間性放棄の世界を転じて、人間性を回復せしめるということです。

(観経四帖疏講義／法蔵館)

そして、いよいよ耆婆はアジャセ王に積尊の存在を教えます。積尊を「大良医」と呼び、立ち上がることを呼びかけるのです。「神医」との異名で呼ばれる耆婆が「大良医」と呼ぶのです。「速やかに仏の所へ往すべし」と言葉をかけます。

(つづく)



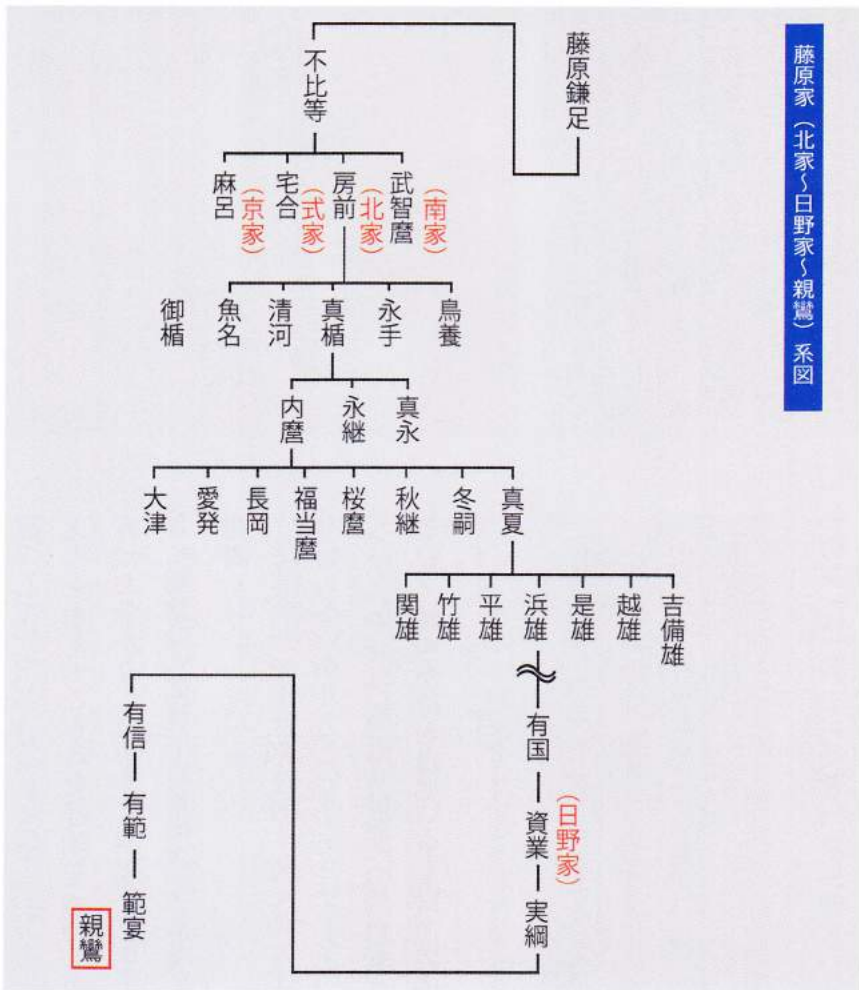
宗祖 親鸞聖人 生涯と周辺

文ノ平松正宣 (教元寺副住職)
(東京三組教導補佐)
第2回

親鸞聖人の出自について、ひ孫の覚如が著した『本願寺聖人伝絵(御伝鈔)』に「聖人の俗姓は藤原氏、天児屋根尊二十一世の苗裔、大織冠 鎌子内大臣の玄孫、近衛大将右大臣 贈左大臣 従一位内麿公 号後長岡大臣、或号閑院大臣、贈正一位太政大臣房前公孫、大納言式部卿 真楯息 六代の後胤、弼宰相有国卿五代の孫、皇后宮大進有範の子なり。」(『真宗聖典』七二四頁)とあります。登場する人物が多いので要約しますと、「天児屋根尊(天児屋命)」とは『古事記』や『日本書紀』など日本神話に出てくる神の石柱で、藤原氏の始祖とされています。「鎌子」とは、飛鳥時代の「大化の改新」の中心人物で、事実上の藤原氏の始祖である中臣(藤原)鎌足を指します。

奈良時代に藤原氏は四つの家に別れ、そのうちの一つである「藤原北家」の初代が「房前」となり、「真楯」「内麿(内麻呂)」と続いていきます。「有国」は藤原内麻呂の傍流の子孫で、有国の子どもの藤原資業が、領地の日野(現在の京都市伏見区)に薬師堂(現在の法界寺)を建立したことで、資業以降

の一族が法界寺を氏寺として、日野姓を名乗るようになりました。親鸞聖人の父親で、有国から5代後の子孫である「有範」は皇太后職でした。今という宮内庁の上級役人に当たると言われています。母親については、江戸時代以降に書かれた親鸞聖人の伝記において、源氏の血筋の女性としていますが、



↑法界寺(京都市伏見区) 日野氏の氏寺で、親鸞聖人誕生の地と伝えられています(真宗教団連合ホームページより)

明確な根拠はなく、今のところどのような人物か分かっていません。残念ながら、現代も人物の権威付けをするときに、血筋について触れる場合があります。親鸞聖人自身は一人の念仏者、あるいは一人の凡夫として生きていたため、自身の権威付けを必要としなかったと考えられます。しかし、聖人が亡くなって後に子孫や弟子によって教団が形作られていく過程で、聖人ひいては教団の権威付けのために、由緒ある藤原氏に連なる血筋として、あえて伝記などに記されてきたと考えられます。

Topics

東京三組からのお知らせ

● 東京三組公式
ウェブサイトをオープン
しました

東京三組の公式ウェブサイト
がオープンいたしました。

東京三組所属寺院のご紹介や
組報「縁」のバックナンバー、
ニシヤムなどの書籍のご案内、
各種講座のご案内や、ご報告
など様々な情報を詰め込んで
います。

またウェブサイトをオープンにあたり、新し
い教化事業の取り組みといたしまして、
月替わりで東京三組各寺院(住職、副住職
など)がリレー法話を東京三組ウェブサイ
ト上で公開いたします。音声と併せて、
話者本人によりテキストも公開します。
併せてご覧ください。



↑今後発展をさせていく予定です。東京三組門
徒会についての情報発信もさせていただきます。

東京三組公式ウェブサイトは

<https://sites.google.com/view/tokyo-sanjo>

よりアクセスしてください。

スマートフォンなどの携帯端末からご
覧いただく方は左記QRコードを読み
込んでください。



東京三組WEB用QRコード

● 東京三組より聞法会講義録
「ニシヤム」第3号と第4号が
発刊されました

組報「縁」前号発行以降、「ニシヤム」の
発刊を2冊いたしました。

第3号の内容は平成二十九年に「真宗
門徒の集い」という東京三組門徒会主
催の聞法会の全三回分の内容となつて
います。ご講師は望月廣三先生(兵庫県
洲本市/浄泉寺住職)。本の講題は「歎
異抄聴記 念仏は悲鳴である」です。
先生はご講義の内容に全編加筆校正
をくださいました。



→ A5版 146頁700円

そして本年十月第4号を発刊しまし
た。内容は平成二十七年の「真宗門徒
の集い」のご講義です。ご講師は佐野
明弘先生(石川県加賀市/光蘭坊住
持)です。この年の全体テーマは「礼拝
聞法正信」という東京三組の教化テ
マです。(※今号の巻頭コラムの講題
と同じです。)佐野先生の講義録は
第1号、第2号に続いて三冊目で、
現在のところ、最終巻となり、全ての
講義内容の書籍化が完了いたしまし
た。「ニシヤム」の「用命は東京三組の
各寺院へ、お問い合わせください。



→ A5版 152頁500円

編集後記

前号はコロナ感染症を受けて緊急
特大号を出しました。あれから1年
以上が経過して未だ完全な収束は
していないとは、思いもよらなかった
ことであります。

しかし、感染者数は落ち着いてきて
ワクチン接種も進み、治療薬の開発
も進んでいるとのこと、少し安心
できる状況になってきました。

未だ世界では感染収まらない中で
はありますが、この度の感染症によ
る社会の変化は当然ながら寺院、
特に聞法という仏法の会座を伝統
としてきた浄土真宗にとって、場の
喪失という問題提起をされた機会
だったのではないかと思います。

大事な場を大事な場として、開いて
きたのが、大事な場として臨んで
いたのが、姿勢が問われるところで
す。



(しゅうまん)